
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate or cite without permission.

2024 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

日時：2025 年 2 月 27 日（木）09:00-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 303 室

主催：「環ヒマラヤ地域における農牧複合フロンティアの実態解明－語彙研究のアプローチから－
(jrp000297)」

参加者数：12 名（内、1 名は zoom 参加）

1. 平田昌弘（AA 研共同研究員，帯広畜産大学）
「共同研究課題の目的」
2. 平田昌弘（AA 研共同研究員，帯広畜産大学）
「チベット・ヒマラヤ山脈南面シッキムの農牧複合発酵文化：2024 年度調査報告」
3. 海老原志穂（AA 研共同研究員，京都大学）
「西シッキムにおける牧畜文化語彙の調査報告」
4. 小松原ゆり（AA 研共同研究員，明治大学）
「インド・ダージリンの歴史文物に関する調査報告：農牧複合フロンティアの近現代史」
5. 熊谷瑞恵（京都大学）
「パキスタンのバルティ Balti とペルシア系山岳牧畜民ワヒ Wakhi の比較分析」
6. 別所 裕介（AA 研共同研究員，駒澤大学）
「アムド南部半農半牧村における羊放牧の現状」
- 7 ロザンイシ（帯広畜産大学）
「甘肅省南チベット自治州マチュ県ウラシュマ郷のアムド牧畜地域における羊放牧の現状」
8. 全員
「総合討論」

以下に研究会の要旨を付す。

今回の研究会では、ヒマラヤ南斜面（平田、海老原、小松原）、ヒマラヤ西部（熊谷）、チベット高原（別所、ロザンイシ）からの事例報告があり、環ヒマラヤ地域における牧畜の動態について議論が交わされた。

平田、海老原、小松原の発表は、インド北部シッキム州西シッキム、ベンガル州北部ダージリンでの 2024 年度の活動報告であった。標高は 1500 m 前後の事例である。ヒマラヤ南斜面のシッキムには、チベット系の諸集団が農牧複合の生業を営んでいる。チベット系の諸集団は少なくとも 17 世紀にはチベット高原からシッキムに移動してきた人々である。食文化から鑑みると、チベット高原からヒマラヤ南斜面への移住は、草原の民から森林の民への転換であった。つまり、チベット高原の草原においては生業を全面的に家畜に依存し、肉と肉汁のうま味を用いて食が成り立っていたものが、ヒマラヤ南斜面では家畜への依存度が低下し、森林資源の食材を多用しつつ、熟成チーズと納豆のうま味を調味に積極的に用いた食文化に変遷していた。ヒマラヤ南斜面は、チーズを熟成させる文化と大豆を熟成させる文化（納豆加工）とが共存する極めてユニークな場であるが、それはチベット系諸集団の人々が肉資源から発酵食品資源（熟成チーズと納豆）へと食文化の調味の土台を変化させたことを意味していた。逆に、ヒマラヤ南斜面は温暖で湿潤であったからこそ発酵食品が発達し、発酵食品がチベット系諸集団の南下（ヒマラヤ南斜面への移動）を支えたとも言える。以上をまとめると、環ヒマラヤ地域における農牧複合フロンティアの実態解明の一つ成果として、ヒマラヤ南斜面の温暖で湿潤な生態学的環境場こそが、発酵食品の熟成チーズと納豆の発達を促し、チベット系諸集団の南下を支えたと指摘することができる。

熊谷の発表は、パキスタン北部のギルギット・バルティスタン地域のバルティ牧畜民とワヒ牧畜民の事例であり、両者をウイグル牧畜民をも交えた三者比較させながらの報告であった。バルティでは、ヤクからミルクを搾らない、2 歳畜を区別する名称がない、去勢しない、ヤクとウシの交雑種が多いことなどが報告され、逆にワヒではヤクから搾乳し、去勢もするとのことであった。同じヒマラヤ西部地域ではあるが、集団によりヒトと家畜との関係は多様であり、それがどこに起因しているのかは今後の課題となった。

別所とロザンイシの発表は、チベット高原アムド地域での近年の家畜管理の変化についての報告であった。中国甘肅省甘南チベット自治州マチュ県ウラシュマ郷を事例とし、地域の世帯数と家畜頭数は増加しているものの、世帯当たりの家畜頭数は近年は減少していることを報告した。世帯当たりの家畜頭数が近年減少している要因は、家畜当たりの放牧地面積の減少と草地後退による放牧地からの野生草本植物（飼料資源）の供給源少、病気や害獣による家畜損失頭数の増加、出産頭数の減少、市場経済への依存度の高まりによる家畜販売頭数の増加、WTO 加盟後による 2018 年前後からの家畜頭数価格の下落によっていた。今後の

持続可能なチベット牧畜のあり方として、放牧地への家畜放牧圧の減少、収入の増加のため、生業を「分業化」していく必要があることが指摘された。全ての牧畜民が家畜を飼養するのではなく、家畜を飼う世帯、乳加工のみに特化した世帯、屠殺・精肉加工に特化した世帯、皮革加工に特化した世帯など、それぞれに生業を特化した世帯間ネットワークを形成し、地域において複合的な生産活動を形成することが重要であるとするものである。近年のチベット高原アムド地域での牧畜は、放牧地状態の変化、家畜飼養の集約化、市場経済化の中で、激動の時期を迎えていると言えよう。